

平成 21 年 5 月 18 日現在

研究種目：	基盤研究 (C)
研究期間：	2006～2008
課題番号：	18520184
研究課題名 (和文)	「アイリッシュ・ディアスポラ」と独立運動 (19 世紀アイルランドの表象研究)
研究課題名 (英文)	“Irish Diaspora” and Independence Movement (Representations of Nineteenth-Century Ireland)
研究代表者	
内海 智仁 (UTSUMI TOMOHITO)	
岐阜大学・地域科学部・准教授	
研究者番号：	00185050

研究成果の概要：19 世紀アイルランドを、2つの視点——「アイリッシュ・ディアスポラ」と独立運動——に着目して、捉えなおす試みである。どちらも、世界的に（特に、イギリス、アメリカなどに）衝撃を与えた現象・事件であった。本研究では、文学作品はもちろんのこと、日記類や新聞・雑誌、そして諷刺画なども参照することにより、両者が密接な相互関係のもとにアイルランドの文学・文化に及ぼした影響の一端を明らかにすることができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,600,000	0	1,600,000
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	540,000	3,940,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 英米・英語圏文学

キーワード：英米文学 アイルランド ディアスポラ

1. 研究開始当初の背景

平成 8・9 年度に科学研究費補助金（萌芽的研究：「帝国の周縁から見る 19 世紀英文学（ユダヤ人、「ジプシー」、アイルランド人）」）を受け、遊動する人々に焦点を合わせて、文学を新たな見地から捉え直す研究を行った。

また、平成 13～15 年度には同補助金（基盤研究 [C]：「19 世紀アイルランドの表象研究（「ナショナリズム」とアイデンティティ）」）を受け、文学に現れるアイルランド像を作品テキストに即して綿密に分析する作

業を行った。特に、アイルランドのナショナリストたちが、19 世紀の文学・新聞・諷刺画等においてどのように描かれてゆくかを、詳しく見ていった。

さらに、平成 15 年度には内地研究員（研究課題：「帝国」との関わりの中で捉える、19-20 世紀アイルランドの表象研究）」として、京都大学において研究を進めた。「大英帝国」との政治的・文化的な対立や、アイルランド内部の様々な独立運動を新たな地平から再考し、それらが、アイルランドの文学的・文化的な「ナショナリティ」や「ナショ

ナリズム」を形成していく過程を跡付けた。
本研究は、こうした研究を統合・発展させるものである。

2. 研究の目的

本研究は、19世紀アイルランドの特徴的な表象に焦点を合わせて、アイルランド文学に新たな見方を提供する試みの一つである。19世紀アイルランド人の2つの典型的な行動パターン——〈独立運動〉と〈国外脱出〉（いわゆる「アイリッシュ・ディアスポラ」）——に着目して、両者の密接な相互関係がアイルランドの文学・文化に与えた影響を明らかにすることを主たる目的とする。

当時の文学作品はもちろんのこと、日記類や新聞・雑誌、そして諷刺画などにもあたり、激動の世紀のアイルランド像を、この2つの視点（「アイリッシュ・ディアスポラ」と独立運動）から立体的に浮かび上がらせる。

アイルランド内に留まった人々を英国との関係の中でとらえるというだけでなく、他国への移民・脱出者の視点も導入し、アメリカやオーストラリアなどとの関係も視野に入れる、新たな試みである。

3. 研究の方法

(1) 文学作品のテキストから、アイルランド文学に現れた「ディアスポラ」や独立運動の表象を探り出し、分析を行った。同一作家の中でのその像（表象）の変化、作家間での共通点・相違点などを、整理し比較・検討した。

文学作品も狭義の「文学」に留まらず、新聞・諷刺画（例えば、イギリスの『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』や『パンチ』など）や、移民たちの日記・手紙なども含め、できるかぎり参照した。

平成18年度は、主に、「大飢饉」（1840年代）以前の作品テキスト、平成19年度は、主に、「大飢饉」前後の作品テキスト、平成20年度は、主に、「大飢饉」以後の作品テキストを、それぞれ、分析の対象とした。

(2) (1)と並行して、アイルランドの文化史および政治・社会史に関する研究書・資料、19世紀終わりのパネルらの独立運動やアイルランド文芸復興運動などに関する研究書・資料なども合わせて読むことにより、反植民地主義や国民国家形成の動きの中で、アイルランドの「ディアスポラ」や独立運動を、多面的に、事実即して把握した。

(3) (1)と(2)の作業を総合的・立体的に検討し、19世紀アイルランドの「ディアスポラ」

と独立運動の様相を、具体的なテキスト分析を通じて明示した。さらに、研究全体の総括を行い、成果を発表した。

(4) なお、研究全般を通じて、分析の対象となる文学作品および研究書・資料などは、設備品費で揃える他に、これまでに一部揃えた文献資料（現有設備）を活用した。さらに、調査研究旅費を使い、他大学等が所蔵する資料も利用した。

4. 研究成果

(1) 本来、ユダヤ人の「離散」を表す用語であった「ディアスポラ(diaspora)」は、今や現代世界の特徴を示す重要な概念の一つになっている。19世紀において最も顕著であったのが、アイルランド人の「ディアスポラ」——「アイリッシュ・ディアスポラ(Irish Diaspora)」であった。

1800年から1914年の間にアイルランドを出国し離れた人は、800万人を越えるとも言われる。また、1845年に始まる「大飢饉(Irish Famine)」は100万人以上の死者をもたらしたが、同時に、続く10年の間に約150万人のアメリカなどへの移民を生み出している。

一方、ロバート・エメット、ダニエル・オコンネル、パーネルなどの、19世紀アイルランドを彩るナショナリスト・独立運動家群像を考えると、フランス、アメリカなどのカトリックやアイリッシュからの支援を忘れることはできない。

ユナイテッド・アイリッシュメンの蜂起、世紀半ばの大飢饉、フィニアンによる独立運動、そして世紀終わりのチャールズ・S. パーネルの活躍と失脚、といった19世紀のうねりは、アイルランド文芸復興運動と相俟って、20世紀のアイルランド文学の隆盛、イースター蜂起、独立戦争へとつながってゆく。

(2) 「ディアスポラ」や独立運動の表象に絞って、入り組んだ対立・相互作用の中で、広く19世紀全体のアイルランド文学・文化を捉えようとする本研究は、具体的なテキスト分析（文学作品はもちろんのこと、日記類や新聞・雑誌、そして諷刺画なども含む）により、激動の世紀のアイルランド像を、この2つの視点（「アイリッシュ・ディアスポラ」と独立運動）から立体的に浮かび上がらせるよう試みた。

研究成果の一部は、現時点で、別項に示すように発表されている。すなわち、雑誌論文①、②および学会発表①である。

(3) 雑誌論文①は、19世紀英国におけるアイルランド(人)の表象の一端を、絵入り週刊誌

Punch の挿絵に見ることを試みた。特に、ジョン・テニエルのいくつかの諷刺画において、「猿・怪物のような悪いアイルランド(人)から、乙女のような良いアイルランド(人)を守る、正義の士ブリタニア」という英国中産階級のアイルランド(人)観・ステレオタイプが、最も典型的に表れていることを、具体的に示した。

雑誌論文②は、トマス・ムアの詩とエメットの蜂起とを関連付けて考察した。アイルランドの独立運動家ロバート・エメットは、蜂起に失敗し処刑される(1803年)が、その死とともにナショナリストの偶像となる。雄弁、恋人セアラ・カランとの悲恋——「エメット伝説」は、アイルランドの人々にとって今も支配的なイメージのひとつであり続けている。本論は、同世代の詩人トマス・ムーアの『アイルランド歌曲集』から二篇を取り上げ、彼(ら)を、崇拜でも冷笑でもなく、実在した等身大の人物として捉え直すことを試みた。また、ムーアのもつ二重性とその限界も明らかにした。

学会発表①は、アイルランド西岸の歴史ある港町ゴールウェイ(Galway)をとり上げ、その特色や、移民と「ゴールウェイ(湾)」との関わりを概観しようとした。ゴールウェイ市は、古くからスペインとの深い関わりもあり、近代においては、飢饉などによる国外脱出者・移民たちが多数ここから大西洋を渡り、「新大陸」アメリカへ向かった。ゲール語、ケルト文化を色濃く残すと同時に、アイリッシュ・ディアスポラの象徴ともいえるべき場所である。「アイルランド文芸復興」運動との関わりも深い。本発表は、主として19世紀のゴールウェイを概観し、その特色・意義を指摘した。

(4) 文化と「ナショナリズム」、国家と移民、政治と文学といった問題に直面する今、「ディアスポラ」・独立運動・反植民地主義と文学との関係を探ることは、大きな現代的意義を有すると思われる。歴史、社会学、文学批評、フォークロア、文化研究など、様々な学問領域を横断するこの現代的テーマを、本研究では、主として文化的イメージ・記憶を基軸にすることにより、異文化交流や文化移植(cultural transfer)に光を当て、その実相の一端を明らかにするよう試みた。

アイルランドからのアメリカ移民に関しては、近年、着実に研究が進んでいる。しかし、「ディアスポラ」を19世紀アイルランド文学・文化の中心的トピックとして捉える本格的な研究は未だ見当たらない。こうした研究状況において、一つの端緒として本研究の占める役割は、必ずしも小さいものではないと考えられる。

(5) 単に「ディアスポラ」概念を理論的に深めるだけでなく、独立運動などの実態をより的確に把握し、延いては、アイルランドの文化・社会状況を新たな地平で見理解することにつながる——そのような文化研究をいっそう充実すべく今後も努めたい。

アメリカ独立戦争やフランス革命、ユナイテッド・アイリッシュメンの蜂起と鎮圧、併合法の施行、ロバート・エメットの蜂起、ダニエル・オコネルのカトリック解放運動、フィアンの独立運動(アメリカからの支援等)など、さらに深める必要のある事象は依然として多い。

また、モーガン夫人、マライア・エッジワース、トマス・ムーア、シェリダン・レニファニユ、グレゴリー夫人、W. B. イエーツ、J. M. シング、ジョイスなど、多様で数多い作家群の研究は、あまりにも手強い。

その中で、一つだけ挙げるとすれば、「大飢饉」と「アイリッシュ・ディアスポラ」との研究を深化させることが、次の最重要課題であろう。百万人単位の死者と国外脱出者をもたらし、アイルランドの人口をほぼ半減させたといわれる大惨事に迫ることが、アイルランドの文学・文化研究における正道だと考えるからである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 内海智仁、「*Punch* 中のアイルランド(人)——ジョン・テニエルの諷刺画——」、岐阜大学地域科学部研究報告、第23号、29-41、2008、無
- ② 内海智仁、「『アイルランド歌曲集』の詩二篇——ロバート・エメットとセアラ・カラン——」、岐阜大学地域科学部研究報告、第20号、85-94、2007、無

[学会発表] (計1件)

- ① 内海智仁、「ある港町の物語——ゴールウェイ——」、日本英文学会中部支部第60回大会、平成20年10月19日、信州大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内海 智仁 (UTSUMI TOMOHITO)
岐阜大学・地域科学部・准教授
研究者番号： 00185050

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし